



ロシア語に翻訳された日本文学作品。左上から『万葉集』、『源氏物語』、松尾芭蕉『作品集』、夏目漱石『作品集』、芥川龍之介『羅生門ほか作品集』、川端康成『雪国』、三島由紀夫『仮面の告白』、安部公房『作品集』、村上春樹『羊をめぐる冒険』。21世紀に入り日露の研究者の協力により現代文学の翻訳が進んでいる。



左：ロシアのサンクトペテルブルクにある国立人類学・民族学博物館(クンсткаメラ)。ロシアの日本学は18世紀前半にここから始まったとされる。右：同館所蔵の日本人漂流民伝来コレクションの一部。右の扇は江戸後期の漂流民・大黒屋光太夫がエカテリーナ二世に献上したものと伝えられる。



文学を通じて
近くて遠い人々ともつながることで、
互いの理解をめざして
対話への道をひらきたい。

2 異国への憧れから始まった比較文学の研究を、文学の世界史を作るといふ動きにつなげたい

文学部／大学院文学研究科 教授

溝渕 園子

SONOKO MIZUBUCHI

東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業、同大学院地域文化研究科博士課程単位取得退学。博士(文学)。熊本大学文学部准教授、本学大学院文学研究科准教授などを経て、2018(平成30)年より現職。専門は比較文学。日本とロシアとの関係を軸に、近現代の言語文化の越境をめぐる諸問題を比較文学的に考察する。異文化表象や翻訳文学などに着目しながら、制度としての文学を問う研究を目指している。

比

比較文学とは、複数の地域や言語文化を横断し、文学とは何か、文学そのものについて考え、理解しようとする学問です。私は近現代の日本と、ソビエト連邦時代を含めたロシアの文学的相互関係について、さらに翻訳や異文化表象について研究を進めています。

比較文学では、比較対象となる2つの国や地域だけを取り上げればよいというわけではありません。たとえば、私の専門である日本とロシアの文学では、両国の力学だけでは見えない部分があります。ソ連時代の文学研究にはアメリカの存在は外せません。そうするとアメリカとソ連、さらには日本とアメリカの関係も追究する必要性が生じて対象となる国や地域が増えていく、比較文学にはこうした広がりがあるのです。

そもそも私がロシアに興味を抱いたきっかけは、子ども時代に当時のソ連から来たポリショイ・バレエ団の公演を観たことでした。当時、新聞やニュースで見聞きするこの

国のイメージは、あまり良いものではありませんでした。そんな国からやって来たバレエ団の絢爛豪華なステージが、私を魅了したのです。そしてこの不思議な国の児童文学を手にとると、そこにはヨーロッパとアジアの雰囲気や併せ持つエキゾチックな挿絵や、魅力的な物語、響きの面白い言葉にあふれた世界がありました。長じてさまざまなロシア文学に触れるうちに、原文で作品を読みたいという気持ちが高まり、大学でロシアの文学研究を志し、現在に至ります。

比較文学では文学の多様性を重視する一方で、普遍性にも比重を置いています。それぞれの地域や言語の文学に固有の特徴を見つめながら、地域や言語を超えた普遍的なもの、つまり人間が文学を生み出すメカニズムを解明していく学問でもあります。こうした研究の特性上、一人でできることには自ずと限界があります。そこで必要になるのが、他の研究者とのネットワークや共同研究です。文学研究という「孤独な作業」のイメージを持

たれるかもしれませんが、他者と関わる機会が多く、チーム作業的な一面もあります。

比較文学は19世紀頃に成立した学問ですが、実は新しい学問でもあると思います。たとえば、1990年代以降のグローバル化の影響で翻訳の問題が再び注目されるなど、新たな発見や既成概念の破壊といったスリリングな展開を見せている、古くて新しい分野なのです。こうした中で現在、「世界の文学史」を作るといふ壮大なプロジェクトが進行しています。世界にどんな文学があり、人間の足跡があるのか…。数多の文学に紡がれた一つの織物のようにその歴史を手にとることができたら、そして私の研究が、綾なす一筋の糸になることができたら、どんなに素晴らしいだろうと思います。また文学には、若い頃に読んだ作品でも年齢を重ねて気づく面白さがあります。文学を通じて人生を知り、人生を通じて文学を理解する。こうした奥深さを多くの人々と分かち合うことも、自分のライフワークだと感じています。